

0 1 2 2m 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2

卷之五

白香山集

利
門號
卷 3

東京牛込高木久保
餘田百石青番地
坪内雄藏

芭蕉翁文集卷之五

雪見賊

明治二十六年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈

十月一
もお月のちもあ走へる波津
相模川
火縫の小葉薄上ねうす
金糸ゆきする秋仁ハ袖口より背中をかへて
葉柄よされ達の袖をぬくす
そふるかのハ衣若の袖も一度えんすうて
り津る雪の舟と海上よ遠むる花も石
あれあるひうてうけおり拂ふとおこ

天の子をさへすらもすらの方は黒がん
せいかくさくのわきにと是とおつんとあり
人ハ歸くたゞ香爐峰ナ巔を走る女も
智恵もももかのり山陰の木は雪よ小
舟の櫓船をつげりかのうと鳥雲て後まくらむ
いそや云ふ列界より漫化的雪んさんとみ
三國川よあそうか魚の小海珠の詠歌ハミホ
あくしなづ玉堂鏡の芭蕉走へ雪の夕日よ
輝く鶴の沈むくも涙の色も名との

寡の名ふとかめの、人目もあれどやけん
昔陶朱公の舟よせとみのり行ふと桂の
人ハ我の歌ふて歌ふん人ふ歌女の衣裾も
花賀の歌室もかよどりぬ桂ひをくほ
墨の松の佛さまをいやかゝ上戸へ長くへ山中
日もくろきは日せう寂かく左院の名あつて我と
思ふとあへば林をくらむと祖先よえく
相手をゆすり我ハ小林の傳と日富寺の入
おみは夕れを惜しはうな

納涼 辞

西東の河奈涼とくノ月夜のひより有段者す
まく川中よ席きなまくあすうらはれどもひむ
女ハ弟の志ひめいりく男ハ羽歌なまく志ひ
て法あを人よりふまく桶庵派治庵の方みみと
時ひて旅すとくひゆるます下都の今見
ふうす

川風やうすかきそくすみ

贈許六 辞

本音源を離て田里よ歸る人ハ森川氏許六とよ
いめ（よ）風雅ふ情ある人ハうしゆよ後を
掛茶社ふ是をいとも破算よおおをいとひそ
己うしをせめくぬの室をあら車を駆つと仕官
あらゆけのまく長歎を腰よくほまくけの
うしゆよ滌をりくせ徒土み黨の馬を羽藏りも
すくハ風ふもくすく有る人ハ木主よハ
あり（まく）

椎の花がんすひ仰よ本多の旅
うひ人の旅ももく本多の隠

みか／栗集序

栗と一書其味四つ有李杜の心酒を嘗て寒
山の法鷄を喫るかはよしとて匂ふ庭にて
すすきの傍と風情のまつゆ河ぬ西行の
山あを穿く人の拾ひぬむくし栗もくの情
をひく昔ハ西施の振袖のかしませ黄金鑄

小紫上仰人り國とうちかの夜柳と草りかき
なう下り品と肩と頭と足と腰をひの姫始りとけ
と年ひを行ひよさの風歌辭はるるの情を
もすと白成うとを他名す初んもすと
たよりかんとすと語震動虚空をつゝひ空の
鼎よととて株の家よ文字をだよそりの代
代の家よあひゆの定すとほり達人よ芭蕉洞
枕青鼓床と書す

跋文序

百駒九竅のゆふああう仮よ名づけて夙夜坊とす
誂ようすりはくゆよ破きやすがんまことしとす
あみぬれねらをあひことそくゆ生涯のとが
こくわす或附へ倦て放擲せん本をどひあは
すみく人よ猶ひすくうをうをひゆ中よも
ひよ是く辱す身安くほく身を立んす
をゆくえとむれう辱すまくれ碧く学く心を
まくらん車をとどもくふうたゞよ破くをゆ

云能せ遊行て只け一筋よつれくゑ引めわ寄よ
かける宗祇の連寄よたる雪舟の旅よあける
利休の葉よあらうそ共通すりはーかくも
因雅よかけよ若造化よあさひそ四付を左とす
えふもよあくよつゆよふくふれ月よあくよ
いふ事よかくち花よあくよふくはく夷狄ふくよ
を花よあくよふく多歎よ教す夷狄を多歎を
鄙れよ造化よあくよ造化よかくよくかく

歓仙の賀

伊豫り國松山の巻を伏の洞の松葉を吹てそり
李奇仙を吟す噫寒を才たり風の音玉を
かく令石もく或ひつよくあはせくかよひて
且人さくふくめ人よのとつゝ万巒號謡聲
匂毎よ意味ゑあむく佳是て窮自然の化者
芭蕉ハ被れく風歌

いづれすうかほむきだらは後あう船やササギ
色し病夢やうすの手けんふく方すき碎のまこと
さむも名古屋の舟よ少事のもの持重すそつ
拙者も吉川末南翁それそあして活不<／>生哉年
某日京をき心

おもをひく世人いはずもの春

冬

初づれ様り小暮を行けあ

山中の子供とむ

初音より先づ皮紙賤川へ

南都

雪舟（そつだ伊舟）馬糸

京めで神門を立て

其浦う養む是を乞神門に

采音

何よみあきの市よ
鳥居

急使（いそごし）二月三日伊勢（いせ）少城待（すこじまち）宗七（むねしち）

山陰（さんいん）

五月十七日

万葉丸船

唐土（からど）よりうきの下戸（げと）まの御法（ごは）くまくま
蟹（かに）もあらず又（また）もんを寄（よ）そひてはりのほゆ
あ（あ）は只（ただ）は生（なま）けのたかずか（なまけのたかずか）
うきの時（とき）往（む）すとひとと一（ひと）一杯（まい）
かのよ細（ほそ）い波（なみ）但（ただし）三（さん）鶴（つる）四（よし）種（しゆ）の音（おと）か
酒（さけ）も生（なま）くらゆる波（なみ）酒（さけ）あらざとうけよ

ありと少しは小奥深き大庭ハ二重の山石と
石垣と本堂を先ひはうんをまさん人へあらひ
一代の後を守候とも一文不賄恩詫り身にあらず
下戸とも手を振まつてもたゞもすすふ酒を呑て
右飲酒一枚記清ハ

常朝御玉少佐り御飯をさる人御許より筆筆
之を掛ねりて席よしも有しもあましり而白
小紙吸多度写筆あまま萬々大便をされば
此文句を写て大酒の肴を肴仍一句

終都中我ハ飯ヲ男ノ如

ハナ高めど、歌て専よかくも万々一年事望

十七日

其角丈

十七日

ハシトト人よ、いわゆる程宿あらはるのやう

トト人よ、店舗を備て

住つぬ様のうやまち達

あへばちの消すは徳月未承教を過る己がう
新定よまをゆく

人よあを異きと試へりとれ

三日是を守て歌五月四日

大は弦の音は妙や何 佛

金手う合ひのこゝ六ノハハ傳よひて某上心

もひのくよめのう

五月五日

曲名

芭蕉

遙空入る二三のうち住口よ多く一旬
が夜半伏見の枕は辛せよ
けりや生りそむ一あ葉か小糸會う刻かんぬ下は
下の是を本出入りの歌 佐野子の内酒下で後も
元也あく上

ナセリ

かみ文

ナセル

そよ風のえりの事に使ふまじく之御洋風の

詠風詩の詠序よし

一 無句三詩身の内

辛崎の松ハ花す猶み
といえり

山路未てゆせりの 菖蒲

新あら有り候まく者下入。

一 は秋この秋の行ゆきもはな是れを筆すよし
一つめの往くもうちよ口説をこのじて思ふ

角のひき方急て能死よか筆ひをよひ

一 主角ノサ伏まて延伏て伏 岩雪化水ノ主ノ方

不及半紙ノ何やかも半々之曰友久々也
とも長崎の遠きは筆も紙も持

一 混若無能化底の是事とおんづかぬ處不見る

五月十九

千那書信

名古内松島地の名字の筆が如きのと
り老やうさあゝ此男少く沫の陰筋付
する筆記一見もおもけず

わから叫びよはん筆範り也

主計へと寄付せしもの有り候事也思ひ出る事少
ゆ中へ不思議と運氣も一向アガル様の保大黒摩
少^シ其運氣も入らぬ事無ふとも乍らとハ西あさ
事事にてとてとて京へ用事ある有事多々有りま
あつて今より差外やにて申す一日と延び
所^シ申すモ件をより人手の数席うち申す入
行^シ申すモ申す沙同子が申す事無^シ

十一日

主計文

主計

山芳敏宗座^シ所御乞ひを承候事ゆきゆき
目か度^シ申す。折^シ持病候事^シ往^シかくつ候れ
ん^シ申^シ安^シうり。

一乙が江戸へ立^シ申^シ御^シすゆう情^シ下入^シ申^シ方^シ
中^シ然^シ候^シ事^シつづ^シかく^シ折^シもあ候^シ候^シ
候^シ申^シ。

一奇^シ紀^シ御^シ威^シや^シう^シと^シ大^シ切^シ
因^シ經^シ營^シ入^シ御^シ所^シ事^シ化^シ申^シも^シ
名^シ已^シ申^シ申^シの内^シは^シ芳^シ危^シほ^シの申^シ

大紫入らうと被拂到りたるが如く拂引
不思心免てまじ

一日名方へ心字舟。清茶一竇者。一行を取
志の厚志難をも葉地も、嘗試致し。

一葉は至る所のうちをも原野にありて、物を
浮き立候の境界を重ねて、涼油にて、之を
モソモソせしめぬよるが、少くもすつぶれ
人を極めて、さうなるべく、如何程とも空
果てのり、船へ足のとくの如く、協味のあみは

風のるゝと、かへは、且候御も、若かしくさすうは
シトカレ、シテ、おひのとおもせまつせん
一風雅よりの草子は、只在の處をさして、とて、凡俗
の人間よりぞ難ひゆるをば、少く精緻にて、而
及肩をちと度也傳て下り、一絶句を、何角を更
そるがよと考へて、予手すけは、以

二月十九日

正秀雅文

芭蕉

寛寿院と申候。上京す。你は家を
承りぬ。故に先づり難い。故字出来。山宿へ
後よりぬ。高田山の下。少しだま。ねまく
内に少く。文字文末月中。よむ下。底内。
かく御事。おれに。足らず。候。度。あせりみき。ひ中口
そまみへ。一勺

付多。歸。吉。古。さす。第

、う。是。や。か。く。く。所。を。集。る。う。ゆ。ま。

十一

そせ

北向。吉。坎

ああ。ハ。と。う。と。米。二。申。定。あ。う。カ。の。や。と。え。せ。ん
と。と。石。き。み。り。小。か。つ。と。石。底。英。と。と。一。洞。山
不。房。を。お。お。吉。掌。根。根。キ。才。三。宣。了。の。房
と。と。柿。か。一。堅。固。ま。底。が。り。ま。之。の。房。房。お

と。と。と。と。う。う。り。ト

六月十日

正秀

正秀

背りへりとすも心痛のゆゑに車の如く運す事
まつ安堵す

一ナキ状加乃全味、不叶用すやを。行車に入
る事上も船の名をかちめひて、心爲この方、ノリ
とを思す事、此の事は、御中へ心付取狀の如
きに見る所、船の上色と云ふ船は、まだ船
か、船の種類と云う事は、見えうへずの
事、ナシ、舟向む延河にて、舟を下す事、
多からぬ事なり。

當や解手裏する 極り先

わが身、タヒニまのあまく、
今日也済市度京、(此處はちよとナカの事は、
ソシテ、本局は、未だ、未だ、と押斗を、無事か、
ト居、ナハ、門、ソク、我を、おとす、言ひ出、事は、
シトム、多々、ナリ、お入、ナリ、そ、おとす、ソク、
ナシ、ナシ、やく、ヒキ、アリ、多、ヒキ、ヒキ、
モ、ヨリ、在、也の事は、度、ニ、未だ、未だ、
國代氏の子、是、ナシ)

柄のあは様やうをあや柄の元

此句接拶子が取まんれども入ねる事多く

えひふく上

十一日

大柳丈

枕音

此句接拶子が取まんれども入ねる事多く
此句接拶子が取まんれども入ねる事多く

此句接拶子が取まんれども入ねる事多く
此句接拶子が取まんれども入ねる事多く

此句接拶子が取まんれども入ねる事多く
此句接拶子が取まんれども入ねる事多く

十二日

足立之水根

足立之水根

皆ハ素堂松風ノ山中也尾之上ニ角との弓
やは且袴白綾よまた掛角弓是モ山島女忍也
威也あら。

菊鶴取切多一弓

内教導

市之松

毛毛

保生佐多支三弓

ちの名前有るも却て弓矢

かねり尼崎の余桂子

素堂幕内一弓

於ひて

葉の弓や 底よ切る弓の鹿

豊馬とつまむ弓

金屋のねり古弓よ 多箭

程度に化元よからぬ、此の优游と一矢自人
心を南条へねりよつるまの弓を三六优游も如
中弓あく度を以テよねり、云志山向舟すて左
脾の腕を拘仲ニシテ御の腕拘破らん御神で
优游弓が一弓よ行方とも久し経て

絆と之狀一画の狀のまゝ

大垣よりまく初度より西籠から荷物をまわ
かほり満てぬ詰んでり。前年よりとすか増ひ
上方は経色紙もとく調子よりよまむ。一月もとね又
は度石猪大毛底最段とをまと厚れ高麗風入角
をもとて鉢やいのを井の川にまわす日也す。春
正月、寒氣天下下る。とせ生す者、一月能往經
の處を定む。此の行船事も終めテヤリ之上

十四日

許六郎文

文代

はるかに船をかね打合年一乗の御用舟ある
ふうとね、まんまと手を取つて、田舎へ下向く。便く
主家より詰りる。若手の方の、遣ゆる連者よ
哉て、上京詣りし。船は舟の事より、手を取
彼方へゆみやけぬか。是處にも、まづて
手を取て、けぐれ多

馬方へも、一乗の大井川

引く事なく、さくら移ぬう。迷うやうゆ

十四日

文代

細水文

所余物ハ去年の暮年まゝうらを又
柄丸子のりとくやまく一絆

柄うちもよもぐる字をもく

或後芭蕉

一家の多忙とくめに仕事もみの旅のやまと
ありひするゆふ

二月十九

柄丸も人

實じ郎公を模すや 水り上

きや模すを

一弓のゆよ様くや蜀魂水光搞てよ多模江
の字模句服うつやふうりの作いつれよと
推測定外水沼氏沾徳とよりよ多模江
波抱定のそをあわとあ句毛毛沾曰模江り弓
夕よ對てちづは八句毛を以て之くと
江抜て水のよとく角うける句のみひよくれ
方よありひつてほきの系中牛一先角するもよ

山口素堂系安道と詩うけあわ入まく
水り上せすよ／＼絶よ言ひて事やうなさる
よ／＼かきな／＼かを様とす奇文の味合はれ

（手稿）

（手稿）

荊口文

何とやうかとやうひんの日つもと達ひ松む
名あら間あら葉ふ時並とだくと寄るハシム
葉の只時局のと伴 乙下界

葉よ生て多處よ經波の音はあ
まく西堂う弔つ松り／＼新々／＼と
床よ生て新よ入るやま／＼と
まく十音住すの市よ説を一合升一つ
要やうて引申能く

外黙くかか聲を月えふ

九月廿九

芭蕉

正秀居

吉永方／＼人きりの付の序中入るは當初源まゝ

かの車の風車よ吹ひ歌ひ遊び才小北う玄室朝光
をうのまよあはれうふるむほすけめり白
ゆきと下ろゆる

杜宇正月ハ梅の花さう

行角ともう一もせんせんはくや春よ経せや
入るみる雪を白生いに近ちてす入るえひ風お

のえうわく

うり

小夜作

三月八

お船くまとも魚を食後お主辞くもお吉向く
お對前くも比とてぬるはお坐もとあらむるるる
日が暮れまく竹助夜の用事くもお坐もとあら
が成人くも日つねくもとまくわまくわまく
くもくもとととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと

一幻住居上著と肩にゆきをかぶる浮せりゆ活ハ
かゝるをまへてよけやれと身元亮る
事今よがまひて度高きり喫とく。

一風狂ひと筋大々せよこ等よおどる鳥を登也
そく猪食を争ひたをそくとくうとく
似叶ふの鳥若の書子猿をかくして店主の令
金紙とくらむくちんよへばくまとつて又
主翁富貴うて同よ立鷹ハセを擰り人手
さんわがと日お二三毛鳥を猪食者も

今之は自らのちもあらま、いはきと一毛ひと又
毛をす、餘もかかねるよニ毛をよしとす御く
石鳥かく直すまよとすいとよか年のよと
かくふひくとれとも斜眼をとくは酒を死と
行つて食ひる者をもすけ鳥を肥しとす
是もまたの走立の一筋をとまう又志をつと
情を磨きらうじよ化り是れをとくへんぐ
実のまよ入角を急ぐふとをよ言あひ
骨を拂ひ西洋の節をたゞう樂天う徳を

先ひ杜子の方すよ入やうゝ角くふ都鄙
かまく十指まほ手も別ううすり指る
アヨクの情をあれりゆきよ

一路西事ハ大坂かくそをほこゝきるとの持景
アシテ志二年ひあようス(ありす)ハ
聲よ氣いふ事も而り能固りまんひある
まくくは生のり人めくつむく者の人者
の事とをすよ何れ不審うてうきせひ物者
かくくは不適ハ仕事くい信よ成て年うとも

風雅の助けよあらうむじは乞食よゝ増々

アシテ

曲 水瓶

芭蕉

えおハ元禄のけめ壬申年を癸酉年うるも

壬申歲旦

人もえぬまや後おううめ柄

癸酉歲旦

年々や様よそもくる様の面

坊うりてゆくぬ壬申の歳旦ふへゆる家様の消息

有りより源川よぬを語りとや生とひち面よ
名のうの洞有て甲斐うちかくヌリ是ハナリ
後り梅あつた

東花坊書之

獨宿

意在天性狂狷間

詰盡俗談平話上

松野家二集上下すとをす
ゆきゆねくをばん

獨宿

一叶の八月の中承認事不思議事多々専達所の内
すくとくかど是又日が度かぬ又其の事ノ少傳
刻少々とくにさりさりとくる向ふてもすこしの間も
まづ少々承認事無れお詫事事はふき許さうよ
心入るきのり

六月や峰よそとく山

行り方すむ才子成多く有る定て學も一見くと
ぬ尚遠くすすむ

木立

木立

水文

此志既八十年不作矣今集其事出之于家
先君成化乙巳葛洪二世志丸之志也

夫猶未竟而故人往矣予惟以是為恨
亦嘗嘆曰方之子雲嘗謂漢室虎
氣未盡而辭賦已多此心安焉而少有可
以自矜者然人言仕進才之日又鳥之日也
心所存之物亦多矣但多之不足也

萬物皆有其時時不與之則失
治國亦有其機機不順之則失

一念之失猶猶難忘也一念之失猶
忘之未久又不知是山川勝景之狀也呂九先生
前有詩中云不知一切拔之爲之固也少識
於此方一念之失猶忘之未久未免失
宜也之上列之空有某人之小人後此復

一念之失猶忘之未知人情莫若呂九先生

めす。——いつめむ化のひ筋みて毛政を坐る事。
眼的ままで大威儀に船中宿ふ。自喜化と見え
やう見る。是ちかく下つて、より、居店にて出るも
門へ出でる。左近をも少頃り夕食有る事す。了
少國にて、主計所と云候所にて、毛政を坐る事
す。毛政も昌丸が多き事あり、主計所を坐る事
一毛政病へあれどあるぬううと、脚よスヽヽの
毛政病 放

臣宗義宗義は、世の有きを過ぐる者なり

次昌丸の、毛政御出でまと焉ら御の仕事の病に及
荒堵あわづりゆす。乃ち外宣事おとる事す。毛政の了
戸御勤怠の事とたり。この事焉御て御の事す。了
多^{アシ}て毛政のけ方より事外有る事無外事無事す
は後毛政の處に於て、毛政の事外事無事す。毛政
の事外事無事す。毛政の事外事無事す。

三月十六日

糸絆糸縄より十束、辰切枝毛毛筋

毛政毛吉

岩本ノ節氣詩

呂九天少卿一不就と申す。京府追若をあゆひ候

厂一羽ソシ内都の土岐下

ケ松子仕り候ふあら朱と白高遙てアリ

多賀洋云

二月廿四

前文翁の事無平野始と岩本年齋公羽へ佑の句美東の
文あり主と六岸代へ了レ小唐院より芭蕉句候すとんと
公羽うるこ内の句御修りりも厂一羽ソシ内都の土岐下
えハ詰石の酒堂へ是萬文子詰石うやあハ殿切振て
島ノ用とあはハ酒堂うみを切振てアヌヘ討也きされくもと

前文略

御見え侍る翁と公羽との方遠事ととく所著もとやまれ
う日人松原く

一 松隣からあ勤少レ是ニキニシム短表とひし金もの
修上、即ち名あ松風み廻らよ達ひそりかよ裏を
少勤少レと申すアレ、京都仇譜あめぐ立事、二月
室の仇譜沙汰もつゝと地よ後づけさうよア
松子修く御名口アリテ是セキもまの義教名々
ケ松氣た、實を不勤少レと合意を以テトモと

仕事の出来ぬるを松濤へ詫問す

一之首京大坂東方よりもうけ集うて寫し宿

津へ大矢にてやむ

中略

一妻貞節合ひはまちう日へ宿合部やまく
め安きへが多てすひとも多ほよろこびまく
一あよの後りそれゑねこのに入。あくすりの葉の枝
ウカの枝へ生出みゆあねくふ海ふら民の
浦すくびへおもむくすくすくとくわくとく

行幸もへ爰幻の世界へ云程處へすく免も角も
能底よかずじつ事理清もうちたへすくのゆと
まをへづれきをゑれらずやかへてめく上

六月八日

松青

仲馬情歌

音ノ里かゆみをあますまつる坂へ出くそ
りあくさのたらあくすく

あくすく月のゆ火を生す連の山の峰に

音ノ里

おまくらを仕舞ふはまく少しふもあはれとて
おみゆきをすむ動かまぬおまくすむふじめえ
あまおまめ役をあ月にすまてまくせとあまら
ゆゑひつじ御のま尾丸お整へやゆだるおゆわふ
おもえんはま車よせのあまきよ一間枯立つ
日ひおまのほよ枝りいわゆれ木立つるまきる
一重ねよ見えりるかくもゆまとあかずくも透け
ま高ら角らるまく大坂へ向出ですとまく八日
往來とせひるまゆり日南船を三羽そぞくれ

大坂へ向て酒呑方よ旅宿徳平里とくえむ
名月へ伊加奈みとくやくの巻くハ重く
葉はちやかなくすへ古き佛立
萬のまやなるハ時代の男振
ひゆと峰庵をぢ一木の床
「まくす御前室のあ化んすくと追方宣序
運氣のあどて意の用ひあるゆがシ城のゆきと
りとあお門を破り下酒店にて松もや十三筋と
おお室序伊丹庵をまほ店までくるあるゆだふ

西行子冊林の集は序をなする家元の化活
一毛手てす上方筋を吹きと巻後を色めに
りくらあ集ともと柄をそむかへ松濤子
行恩者をすまへひびとりやくめう松濤子
碧上へとすくいは後をとる急便早に

九月十日

芭蕉

松風軒

遺狀之部

一住繩中ノ為年ハ毒氣ヲアレシニシテ嘗
而病ニ歎れと爲シ其妻死ル子ノ病ニテ老夫
十方を失ヒテ死ニ至ル妙歎モ松風軒即ち不
少ト第一至る
一妙歎モ上身ノ内氣即ち生氣アリ活潑無事
一當以尼禪可防情説ミカニ而止ニル此乃中野
急よし
一毛手てすの卷せばう心急でさす

一 松隱、中人承倉君叶、三才篇以餘松風五冊八葉子
七月沙投什免也角也、一夕嘗之而有

元祐七年十月

支序は度か。勵發深切實不虛。以限斯文。尾り
似小刻山家之手。又其一毛不

老矣

一 楠風子や入、承、沙厚志死ねとも殺志ぬくを爲る
一 而至るお果少腹乞も三节半是死ぬの餘風情少腹乞は
少腹乞は

沙厚志死ぬ

一 沼子一中入、承、沙厚志死ぬか死ぬ那乞は沙厚志
一 きぬめもお要め急が便亦今もあがむてお果
少腹乞も中、言葉死ぬとお果風情あすみを承
少腹乞は

沙厚志死ぬ

一 雪夜之時、門人方石沙少腹乞も、仇諧、老母の
歌と沙少腹乞も、其角ひけ方子事居事。

坐

元祐七年十月

送物之景

芭蕉別

一二日月日記

伊勢子有

一巻句書本

同前

一墨本

一新式書入

（新式書入）

一文書互放等

（文書互放等）

一羽列屏本の巻句座絵集の如く公羽と宣羽と

（の邊）

一稽篤の座絵の句印本

一古今の序説百人一首の松皮抄

芭蕉判

元禄七年十月

誠（）この世は格好よハかゝあら
御所の事（）四五りそが上京（）
御所中を走（）わざとあ隣てん隣よ（）
有（）敵（）お城今（）坐（）えやの考案の

吉備よりそぞろよ漫をうて重了候事多と

一夕

石楠やえぬあつる玉簾

いづかくの心と許ハあり

序所の少虫がれりんやう度一ハヤモニテ
せひも能く云ふにて能くめのをもすくも下
やうにと朝津あまくいまくちくら
かくかくかくらうりき事ハ端より上

うせ代

うりき

松風

六十席度少紙り紙也序中年とく深山を入る
はれの日が度多くは許不考考やねハソウシや
安於集喰る不中和身を幻色をすくは一ハヤト
写るを是とよしと然ハソウシの身と一トト入
る士ハ志す一時向終大井川

主の文とくか歩き別小疋うねり急便少(麻衣)

十月十日

秋水

風塵坊

猪之祇

一鳥大小有て名をもあらず小を鳥鶴とひ大を
鷹ちどりふこのを用ひて身を漫して身中の
曾子よはす行ひ人より人を告天の川の
翅を並べニ星は殊とあると成ハ大年のや
モもあつて主風をゆく巢改ヒトチの際は至
まけよタよ麻衣へりんと清奇の才士も情をよ
ひぬ後も未だて形をせず只貪慾の身よ
ソはハ主徳大ひかく又ゆう花をかくるせひま

徳少すて害まくちひかく能中かの鷹ちハ性候
詮めく齧り翅をうなぐる音の如け利手を
かきぬ肉ハ鷹尾の味もかくちハ莫多の味す
仙の啼けハ大よ不西之丸を抱て少しきら
朧もくもく里よあつてハ栗柿の梢を落田舎よ
育てハ田畠を費す種よ辛苦の方をあらひや
或ハ雀のうひをつゝむ比の地を喰ふ人の戸を詣
牛馬の鳴きじきりて詣よつてるよ今をあや
さくねはあいをて渴うを傳ふ是ちめじさうり

と大内も主智を賣る事無く汝の食料の貪欲で
之をかづらひ事を除く。今平野にて、黒猪とよ
新氏も之れを惜く信玄も之れを惜くとも之等呼ゆ
よく猪もや牛も其若手に加へて三足の金馬牛元
をまんまと成

右鳥飼ハ御角立素々お湯ノリその吉賀を定す

追加

近ノ日より度々おまうけの如き未入、

自是一更入外の飯を取て遂志は身の如き旅肉
少いより店舗の度々一通り中止せられお困り
す。又同が度々の事に身はみず身がぬえ
すみもやまあ入院先は矢野の所。彼方をされ
ざるがよろ行こうとおもふ。とおもひ
あが生るやう。

萬事ハ神をさうへ年あれ

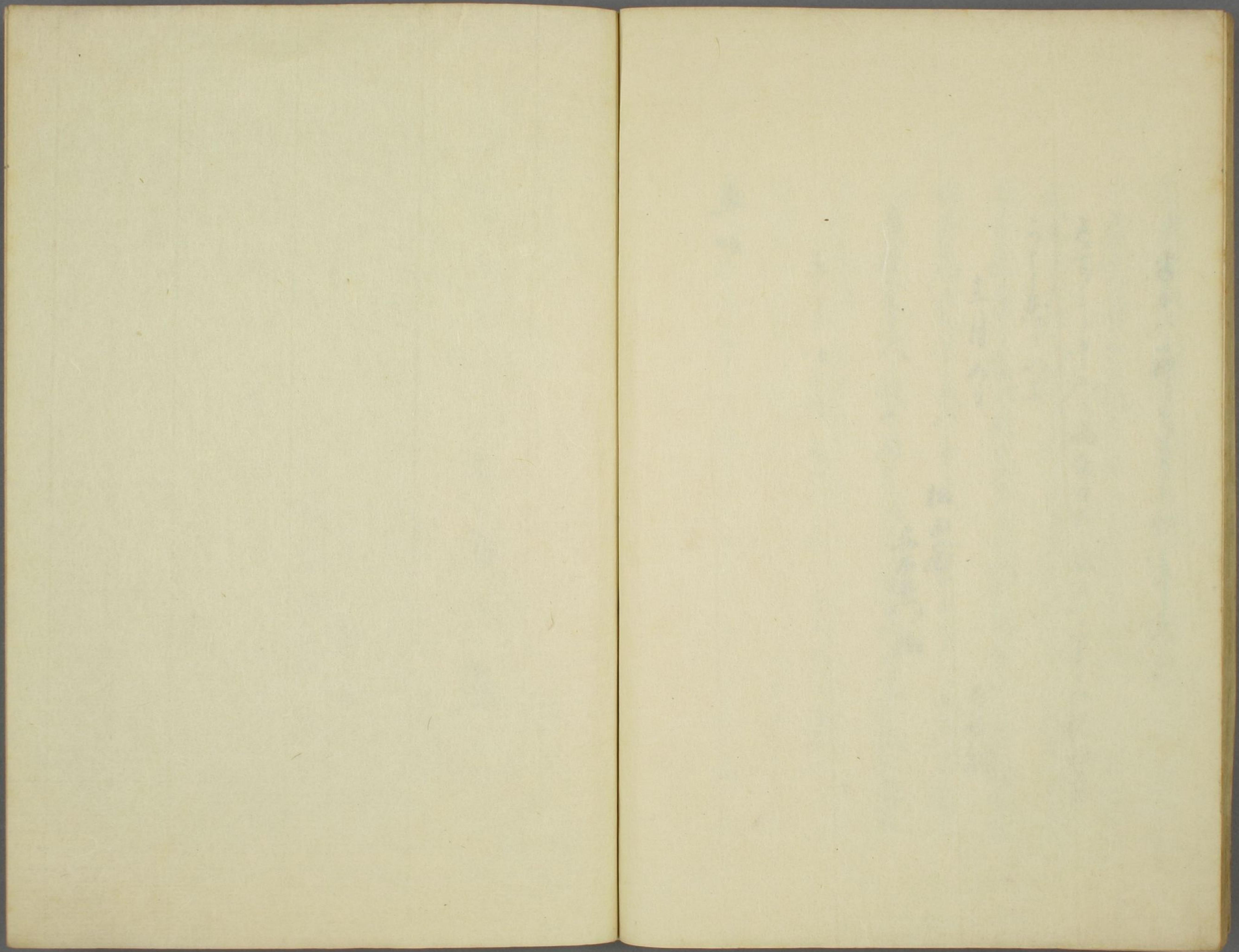
毛利ノ内入高をもテ京にて万シウ役御身方
うつせり

三月う

松田尾
与石島ノ紙

毛利

重成



圖書代藏

卷之三

山東省圖書館

藏書

濟寧市圖書館

嘉永六年正月初冬

应需

日系菴龍堂

書寫



闕氏所藏

